お薦めの一冊

『新装版　聖職の碑』

新田次郎 著　講談社文庫　902円（税込）

生命の尊さと教職者の葛藤
～史実が織成す感動の名作

会員　阿部 成孝（66期）

1　はじめに

2012年に司法試験を受けた後，発表までの間，悶々としていたこともあってか，突如登山をしたいと考えた。登山経験はほとんどなかったが，同じく経験のない友人を誘い，北アルプスの涸沢カールまで登った。その時のカールの景色が素晴らしく，山に魅了され，その後は毎年のように日本アルプスに登っている。登山を始めたことがきっかけで，山岳小説に興味を持ち，新田次郎（以下「作者」という）の本を多く読むようになった。なかでも私がお薦めと思ったのが，今回紹介する「聖職の碑」である。

2　本書について

本書は大正２年に実際に起きた木曽駒ケ岳（本書では伊那駒ケ岳と表現している）における大量遭難事故を取り上げている。中箕輪尋常高等小学校の生徒25名，校長を含む引率教師３名，地元の青年会員９名の計37名で出発し，そのうち11名が命を落としており，その悲惨さは想像に難くない。本書は，大きく⑴登山の背景　⑵遭難事故の模様　⑶遭難の後に記念碑が建てられる経緯，の３つで構成されている。

⑴　登山の背景

当時の長野の教育は，明治の実践主義教育と，台頭し始めた理想主義教育（白樺派）との間に軋轢が生じており，中箕輪尋常高等小学校でも例外ではなかった。実践主義者であった校長は，登山の教育的価値を掲げ，危険であると反対する白樺派を説き伏せ，実行したのである。ただ，無謀というわけではなく，用意周到ではあったが，多くの不運に見舞われ，遭難事故を起こしてしまうのである。

⑵　遭難事故の模様

遭難の原因は，予期できなかった台風の発生とあるべき山小屋が存在していなかったことである。天候については，当時の技術では，予報は難しく，校長は登山の直前まで測候所に天候を聞いていたが，台風を予見できなかった。泊まる予定の山小屋は，行きにすれ違ったよそ者の登山者に燃やされてしまったのか，焼失して高さ１メートルの石垣が残されているのみであった。校長の指示の下，石垣を利用し，簡易の屋根を着莫蓙などで作ったが，結局寒さに耐えきれなかったことなどで，止める校長をよそに，皆が一斉に小屋を飛び出し，大嵐の中，下山したことが，大量遭難に繋がった。なかでも強風と極寒の中，遭難死するものの心の記述が，状況の過酷さを物語っており，引き込まれるように読める。

死者はほとんど子供であったが，校長も子供を庇う形で亡くなった。

⑶　遭難の後に記念碑が建てられる経緯

木曽駒ケ岳には，今回の事故の「遭難記念碑」が立っている。通常は悲惨な遭難事故が起こったのであるから，記念碑ではなく，慰霊碑を立てるのではないか。なぜ記念碑となったのか。そこには最初にあった実践教育と理想主義教育も関わり，作者が紐解いていく。

3　さいごに

本書は，本編の後に作者の取材記が綴られている。それも相当な頁を割いている。この取材記が，本書をさらに魅力的にさせている。そもそもの事件記録を読んで当時の事故状況や校長の対応，記念碑のあり方に疑問を持った作者が学校や教育委員会，そして実際に駒ケ岳登山をして，当時の状況を綿密に取材している。取材は昭和50年頃であり，登山に参加した子供の中には，存命の者が数名おり，その方々の証言も非常に興味深い。私も幾度か木曽駒ケ岳に行っているが，ルートが異なり，記念碑を未だ見たことがない。今後は是非，記念碑を見に行きたい。